



| | |
|------------------|---|
| Title | 本だな「高層気象台100年誌（高層気象台彙報特別号）」高層気象台編 |
| Author(s) | 藤原, 正智 |
| Citation | 天気, 69(3), 176-177 |
| Issue Date | 2022 |
| Doc URL | http://hdl.handle.net/2115/90890 |
| Type | article |
| File Information | 2022_03_0046.pdf |



[Instructions for use](#)



「高層気象台100年誌 (高層気象台彙報特別号)」

高層気象台 編
高層気象台, 2021年3月
167頁
ISSN 0373-5842

高層気象台は、大正9年(1920)年に、中央気象台、海洋気象台と並立する形で設置された。現住所は茨城県つくば市長峰1-2であり、観測地点名としては、館野、館野、長峰、つくば、Tateno, Tsukubaのいずれかが使用されてきた。明治43年(1910年)3月12日に房総沖を通過した低気圧による大きな災害を契機に、「気象の研究や天気の子警報に資する高層気象観測の必要性」が帝国議会で議論され、観測所の建議案が可決された。翌年1911年から、当時中央気象台観測課長であった大石和二郎が欧米各国の観測所に派遣され、約2年後に帰国したのち茨城県内で観測所候補地を探索した。観測所新設の予算が認められたのは1919年であり、現業観測の開始は翌年1920年11月1日の地上気象観測からであった。さらに翌年の4月から小気球と経緯儀を用いた測風気球観測が開始された。大石がこの観測結果をもとに、中緯度偏西風帯におけるジェット気流の存在を世界で初めて発表したのは1926年である。

その後100年にわたり、高層気象台では定常的な高層気象観測が実施されるとともに、関連する様々な技術開発が継続的におこなわれてきた。国内の高層気象観測の中心地としての役割だけでなく、世界のさまざまな観測網の一地点として、観測手法の開発と改善、標準化、人材育成、研究・調査成果の公表(高層気象台彙報の発行)などに大きな貢献をしてきている。

「高層気象台100年誌」は、高層気象台の100年を網羅的に記載した第一級の歴史書であり、技術書である。組織面の変遷、全ての関連測定器それぞれについての開発・改善の経緯や詳細が記されており、さらに12名の元職員の方々による回顧録、高層気象台彙報に掲載された全論文の題名リスト等の各種資料も含まれている。製本された冊子体も存在するが、高層気象台彙報のホームページに章や節ごとに分かれたPDFファイルが公開されているため、興味ある箇所を気軽に拾い読みすることも可能である (<https://www.jma-net.go.jp/kousou/information/journal/>)。構成は、口絵、まえがき、のあとに、第1部(高層気象台の沿革)、第2部(回顧録)、第3部(資料編)、付録、が続くという形になっている。以下に、目次を紹介する。

jp/kousou/information/journal/).

構成は、口絵、まえがき、のあとに、第1部(高層気象台の沿革)、第2部(回顧録)、第3部(資料編)、付録、が続くという形になっている。以下に、目次を紹介する。

口絵

まえがき

第1部 高層気象台の沿革

第1章 概説

第2章 高層気象台の組織・機構等の沿革

第3章 高層気象台で行う観測

第2部 回顧録

第3部 資料編

第1章 主な観測データの所在

第2章 高層気象台彙報リスト

第3章 高層気象台蔵書リスト

付録

歴代高層気象台長

年表

略語集

冒頭の口絵には、創立当初の露場の写真や新旧さまざまな観測機器の写真など、貴重で興味深い画像資料が多数示されている。

第1部の第3章(高層気象台で行う観測)は、高層気象観測の技術開発の中心地としての高層気象台の真骨頂を非常によく表している。この章はさらに次の8節に分かれている。

第1節 地上気象観測

第2節 ラジオゾンデ観測

第3節 大気オゾン観測

第4節 紫外線観測

第5節 日射・放射観測

第6節 GCOS 基準高層観測網 (GRUAN)

第7節 ラジオゾンデ・レーウィン以前の高層気象観測

第8節 その他の高層気象観測

この章を読むと、この100年間、絶え間ない技術的改良と工夫があって高層気象観測が継続・発展してきたのだ、ということが非常によく分かる。それぞれの節の参考文献リストを眺めると、ある期間にその機器の技術開発に中心的に関わった人物が具体的に見えてくるのも大変興味深い。なお、日本だけでなく世界の観測機器の潮流や変遷も垣間見え、世界的にみても大変貴重な資料である。

第2部の回顧録は、読者それぞれの視点や興味により、思わぬ発見があるのではないか。評者は特に、清水正義氏や廣田道夫氏による国産ドブソン分光光度計の話や、梶原良一氏による南極昭和基地でのドブソン分光光度計の交換の話とオゾンホール発見の話（気象研究ノート213号（2007年）の小林壽太郎氏による記事とあわせて）非常に興味深く読んだ。

第3部の資料編の中で、第2章の高層気象台彙報リストには、過去の全ての掲載論文の題名と著者名が記されている。将来的には全ての論文の本文がweb上で読めるようになることを期待したい。多くの論文が、気候データとして一様化の処理をする際の重要な参考情報にもなるはずである。

天気予報のためであっても気候変動監視のためであっても、観測機器と観測手法の継続的な開発改良、新旧測定法の比較検証、および、そういった研究結果の整理・文献化と公表は、気象学と気象業務における基本である。高層気象台では多くの職員の方々のリレーによってそれらを100年間継続してきており、「高層気象台100年誌」にはその歴史が詳細に記されている。歴史の圧倒的な重みを十二分に感じ楽しむことができる書である。気象学と気象業務に興味のある全ての人にとって、これは必読書と言えるのではないだろうか。

（北海道大学 藤原正智）